

「力を抜いて」

龍美は目を閉じ、小さくうなずく。

虎太郎は腰に力をこめ、ゆっくりと肉茎を押しこんだ。

「あ、あ、あ……あつ」

押し開かれる痛みに、龍美の口から悲鳴じみた声がこぼれる。

たっぷり蜜で濡れていたが、膣壁は激しく抵抗した。

おのれ己の端子から伝わる痺れるような摩擦に、虎太郎も声をもらしそうになる。龍美の

なかは熱く、そして狭い。それでも虎太郎は、強引に龍美を犯しつづけた。

「……あう」

肉茎が胎内にある乙女の証に触れた瞬間、龍美が目固く閉じた。

「龍美ねえ、わかる？」

「……うん。コタちゃんのために……とっておいたんだよ？」

「嬉しいよ。だから、龍美ねえの願い通り、俺が龍美ねえを女にしてあげる」

自分のために龍美が大切に守っていた処女膜の感触に、虎太郎は酔いしれる。本当の意味で一線を越えることを、虎太郎はためらわなかった。

虎太郎が凶器をねじこむと、なにかが千切れる感触が伝わってきた。

「痛ッ……」

龍美が悲鳴をあげ、わずかに腰を逃がす。

虎太郎は乱暴に腰をつかむと、一気に引き寄せた。

「あ、あ……やだ……待って……っ」

「待たないよ。まだ終わってないんだから。途中で終わっていいの？」

「だ、ダメッ。それは……もつとイヤッ」

龍美は逃げる代わりに、自分の足をさらに押しひろげる。途中まで埋まっている肉茎と、奥を求めて身体を開く龍美の姿が、虎太郎の征服欲をさらに加熱させた。

虎太郎はゆっくりと着実に犯し、灼熱の杭を龍美の一番奥深くまで押しこむ。根元まで埋めきったとき、先端が龍美の奥にある壁へ接触した。

「こ、コタちゃん……全部……入った？」

「ああ。今、龍美ねえと繋がってる。わかるだろ？」

「うん。お姉ちゃんのなか、コタちゃんदैいっぱいだよ。熱くて硬いのが、お姉ちゃんをぎゅっと押し開いてる……」

満足げに微笑む龍美だったが、虎太郎はまだ満足していなかった。

「これから、龍美ねえを本当に女にするね」

「うん……。お願い、コタちゃ……。んんっ」

虎太郎は本能のまま、猛然と腰を振りはじめた。

「は……。激しッ、うあああッ！」

胎内で生まれる痛みと摩擦熱に、龍美が悲鳴をあげる。

龍美が初めてだということは虎太郎の頭から抜け落ち、ただ男女の営みという種の本能が体を突き動かしていた。

狭く窮屈なエリアに閉じこめられた肉茎が膣壁をしごき、充血した場所が生みだす痺れが龍美の深部に充満する。

「はあ、はあ……。やだっ、奥がおかしいの……。っ」

龍美の荒い息が、だんだんと甘いものへと変わっていく。

処女肉と子宮口を擦られ、龍美の胎内に次々と幸せな痺れが生みだされる。その痺れは快樂の火種になり、彼女のなかへと蓄積されていった。

「……。あっ、ひっ……。はっ」

抽送の衝撃に押されるように豊満な乳房がゆさゆさと揺れ、薄紅色の突起が連れだつて揺れる。蒸気と汗にまみれた龍美の肢体が、虎太郎を求めて光を帯びていた。

「龍美ねえ……。っ」



虎太郎はゆっくり身を倒し、乳房に手を伸ばした。

「……やんっ」

突起がこねまわされるたび、ジワリと痺れがひろがる感覚が龍美をよがらせる。彼女の腰が疼くたび、肉筒の奥に抱かれた牡端子が締めあげられ、膣内で満足げに震えていた。

「こ、コタちゃん……。変だよ……。っ」

「なにが変なの？ 姉弟でセックスしてること？」

「ち、違うよっ、意地悪ッ。奥が、ジンジンしてきた……の」

虎太郎は言葉の代わりに奥深くまで貫き、腰をグラインドさせる。

「そ、そう……。そこっ……」

牡の先端部で子宮口を擦りあげられ、甘美な熱が龍美の芯に火を点ける。

龍美は虎太郎を迎えるように、腰を上下に揺すりはじめた。

柔肉を^{えぐ}抉る肉径が女のなかで痺れを生み、その悦楽が龍美の意識を桜色に染めていく。

「あ、んん、やあっ……。ながが溶けるっ！ 溶かされちゃうっ！」

元々狭くて心地よい龍美のながが、凶器のように虎太郎のものを締めあげた。

「き、気持ちいいよ……龍美ねえ！ 龍美ねえのなか、気持ちいい！」

「ん……嬉しい……っ」

認められた悦びに、龍美の美肉がさらに虎太郎を締めあげる。

(だ、だめだ……気持ちよすぎる！)

限界が迫り、虎太郎の腰がせりあがる。

牡の本能はさらなる快感を求め、龍美の腰をぎゅつと握りしめた。

「気持ちよすぎて、もう、我慢できない！」

「……え？ ん……また、太く……んんっ！」

龍美の言葉を断ち切るように、虎太郎は一気に龍美を突きあげた。

「ああっ！」

甘美に加熱された肉を突かれ、龍美の腰が激しく蠢く。

「やだ……んっ、壊れる……んっ、お姉ちゃん、壊れちゃうッ！」

龍美の腰が激しく踊る。抵抗しようとしても、甘美な麻痺感まひは龍美のなかに渦巻き、

怒濤どとうの勢いで彼女を覆いつくしていく。

彼女の声に喜びの色があったことが嬉しくて、虎太郎は激しく突きあげた。

「あひ……はう……っ」